

# 異なる競技レベルにあるフットサル選手が行う 経験の意味づけのあり方

杉 浦 健<sup>\*1</sup>・加 藤 未渚実<sup>\*2</sup>  
筒 井 清次郎<sup>\*3</sup>

## Methods of Realizing the Meaning of Their Own Professional Practice in Case of Futsal Players with Particular Reference to the Levels of Competitive Skills

(SUGIURA Takeshi • KATO Minami • TSUTSUI Seijiro)

### 1. 序 論

スポーツ選手が競技を続けるにあたって、競技生活の中では、良いこともあれば、悪いこともある。プレーが褒められる、レギュラーに選ばれる、好成績を上げるなど、より競技に前向きに取り組めるようになる出来事もあれば、試合に出られなかったり、重要な試合での敗戦や、怪我やスランプに陥ったりなど、競技に対する動機づけが低下し、時には競技からドロップアウトしてしまう原因ともなるような出来事もあるだろう。そんなさまざまな出来事が起こる中で、さまざまな競技レベルにあるスポーツ選手たちは、それぞれどのように競技を続けているのだろうか。これが本研究の根本的な疑問である。

杉浦（1996）は、スポーツ選手の心理的成長について取り上げ、それが参加動機の適応的変容であると定義した。そしてスポーツ選手は参加動機が満たされなければスポーツ選手を続けることが困難になるのだから、競技を続けられている選手は、何らかの適応的な形で参加動機を変容させることでスポーツを続けていられるのだろうと考えた。さらに杉浦（2001, 2004）では、参加動機の適応的変容が危機や転機の経験を肯定的に意味づける語りのプロセスによって得られることを明らかにした。ここでの語りとは、やまだ（2000）の定義によると二つ以上の出来事をむすびつけて筋立てる行為である。

杉浦の一連の研究から、上記の間であるさまざまな出来事が起こる中でスポーツ選手がどの

---

\*1 近畿大学教職教育部教授

〔キーワード〕 達成動機、転機、危機、自己効力感、移行

\*2 シュライカー大阪

\*3 東海学園大学

ように競技を続けることができているのかを知るためには、競技を続けているスポーツ選手がさまざまな経験をどのように語り、意味づけているのかを調べることが有効であることが分かる。杉浦 (2004) は、「スポーツ選手は、これまでの自分の経験 (成功経験であれ、失敗経験であれ) を自分なりに語ることによって意味づけていると思われる。そして、その意味づけのあり方次第で、たとえばある者はやる気を失いドロップアウトし、ある者は手痛い敗戦を乗り越えて競技に対してより強い動機づけを持つようになる」、「語りによる意味づけの違いによって、我々の自己に対する見方や動機づけのあり方は大きく異なってくる」と述べている。

このような経験の意味づけと動機づけの関係について、近年、自伝的記憶の想起、特にライフストーリーとして語られた自伝的記憶が動機づけの役割を果たすことが注目を浴びている (速水, 2001; Pillemer, 1998; 佐藤, 2000; やまだ, 2000)。ここでの自伝的記憶とは、過去の自己に関わる情報の記憶であり、その中でもライフストーリーとは、人生全体を振り返ってストーリーとして語られた自伝的記憶である (佐藤, 2000)。また動機づけとは行動が起こり、活性化され、維持され、方向づけられ、終結する現象 (鹿毛, 2013) である。自伝的記憶が動機づけの役割を果たすとは、自伝的記憶を想起することがある特定の行動を起こしたり、維持したり、方向づけたりするということである。

たとえば Pillemer (1998) は、自伝的記憶を想起することの意味について注目し、自伝的記憶を想起することが信念を形作ったり、後の行動の指針になったり、人生の目標を達成するための動機づけの源になったりすることを示した。また佐藤 (2000) は、教職課程の学生に教師についての自伝的記憶を尋ね、教職希望意識の強い者はそうでない者に比べ、不快な出来事の記憶が少なく、相対的に快方向の記憶に偏っていることを示し、こうした肯定的な記憶の蓄積が個人を教職に動機づける基盤として機能しているのではないかと述べている。スポーツの分野においては、速水 (2001) が女子大学生のスポーツに対する自伝的記憶と現在の動機づけ (スポーツを今でもやりたいか否かで測定された) との関連を記述研究によって調査している。その結果、試合で勝ったり、うまくできるようになったりなどスポーツでの成功経験がスポーツを今でもやりたいという気持ちを高めていること、試合で負けたり、うまくできなかったりなど失敗経験は、「悔しい」というような感情を通して今でもやりたいという気持ちを高める場合と、逆に「嫌だ」「恥ずかしい」という感情を通してスポーツをやりたいくないという気持ちを高める場合があることを明らかにしている。つまり失敗経験については、同じ経験でも動機づけに与える影響が逆転する可能性があるということである。

速水（2001）は、「人はそれぞれに自分史を刻む過程でスポーツに関しても異なる経験を蓄積することで個々の動機づけを形成すると考えられる」、「自伝的記憶として残された過去の具体的経験を直接掘り起こすことが、抽象化された心理学的概念を扱うよりも現在の動機づけを説明するのにより豊かな情報提供になるように思われる」と述べている。

ライフストーリーとして語られた自伝的記憶が動機づけの役割を果たすのは、ライフストーリーを語ることによって経験が意味づけられるからである。やまだ（2000）によると、ライフストーリーとは、その人が生きている経験を有機的に組織し、意味づける行為である。また意味づけとは、語りによって個々の要素を関連づけ、組織立て、筋立てる行為であり、筋書きを作ることによって個々の出来事が筋立てられ、意味づけられるのである。スポーツ選手も競技を続ける中で経験するさまざまな出来事をライフストーリーとしてどのように語り、意味づけるかによって、競技に対する動機づけ、すなわちどのように行動を起こし、継続し、方向を決め、何を目指すかが変わってくると考えられる。

本研究の目的は、さまざまな出来事が起こりうる競技生活の中で、現在スポーツを続けている選手が、それらの出来事の経験をライフストーリーとして語る中でどのように意味づけ、競技を続けているのか、すなわち経験の意味づけのあり方を明らかにすることである。本研究で調査を行ったフットサル選手は、競技レベルの高さに関わらず、競技を続けており、彼らの語りによる経験への意味づけのあり方は、スポーツを継続する上で降りかかるだろうさまざまな困難や危機を乗り越えるための重要なヒントを提供してくれると考えられる。

前記の目的に加えて、本研究では付随してスポーツ選手の競技レベルの違いによる経験の意味づけの差異を明らかにすることも目的としている。具体的に本研究では、大学生フットサル選手とプロを目指すフットサル選手を調査対象としている。すでに述べてきたとおりスポーツ選手の動機づけのあり方には、語りによる経験の意味づけが関連するのであるが、意味づけのあり方が競技レベルの違いによって異なってくるのではないかと考えたためである。たとえば、プロを目指すような高い能力を持った選手とそこまでのレベルにない選手、常時レギュラーとして試合に出場している選手とほとんど試合に出られない選手などでは、競技を続けるための意味づけのあり方が異なってくると予想される。

またフットサル選手を調査対象とした理由は、フットサル選手はサッカーから競技転向をしている者がほとんどであるが、そのような競技種目の変更がどのように意味づけられているのかについても調査するためである。調査対象者を大学生選手およびそれと同年齢のプロを目指

すフットサル選手にした理由も、彼らがサッカーからフットサルへの競技転向を行ったのち、競技を続けている者だからである。すでに述べたように、自伝的記憶には危機や転機が動機づけや自己変容に大きな役割を果たしていることが知られている（ブルーナー, 1998；Pillemer, 1998；杉浦, 2001, 2004）。本研究のフットサル選手のように競技種目を変えるほどではなくても、陸上競技や水泳における種目変更や、野球やサッカーなどでのポジションチェンジ、プレースタイルの変化はしばしばスポーツ選手が経験することである。それらの経験が彼らの中でどのように意味づけられているのかを明らかにすることは、たとえばコーチ的な立場からそのような処遇を選手にせざるを得ない場合の対応を考えるにあたっても意味あることであろう。陸上競技400mハードルで世界選手権銅メダルを2度獲得した為末（2007）は、高校時代に行った100mからの種目変更に対して、「100mでは通用しないから、400mハードルでもやろうと取り組み始めた種目だった。そうした敗北感」があったと述べている。サッカーからフットサルに競技を変更しているフットサル選手にもそのような挫折感や葛藤があり、それを何らかの形で乗り越えていることが推測される<sup>注1</sup>。

以上のような問題意識に基づき、本研究では競技レベルの異なるフットサル選手、具体的にはプロ下部組織に所属するフットサル選手と大学のフットサル部に所属する選手に競技を続けてきた中で経験した出来事についてインタビューを行い、フットサル選手が競技転向も含めて、さまざまな出来事をライフストーリーとして語る中でどのように意味づけて競技を続けているのかを明らかにする。

## 2. 方法

### (1) 情報提供者

大学フットサル部に所属する大学生男子フットサル選手8名（平均年齢 $20.5 \pm 0.8$ 歳）（以下、大学生選手と明記）とプロフットサルチームの下部組織に所属する男子フットサル選手7名（平均年齢 $20.1 \pm 1.1$ 歳）（以下、プロ志向選手と明記）を対象者とした。ここでのプロとはフットサルを職業として行う選手であるが、プロ契約をしている者はいないためプロ志向選手と表記した。ともに第2研究者が所属していたチームのメンバーであり、ある程度のラポール（信頼関係）が取れていることからより多くの情報が得られると考え、情報提供者とした。語りを示す際には、大学生選手D1～D8、プロ志向選手P1～P7とIDをつけている。

## (2) 調査期間

2014年6月下旬から7月下旬

## (3) インタビュー方法

第2研究者と対象者の1対1で半構造化インタビューを行い、インタビューの様子はデジタルカメラのムービー機能で録画し、インタビュー記録として保存した<sup>注2</sup>。インタビューに先がけてプロフットサルチームのもとに調査依頼書、調査同意書を手渡し、研究目的などを説明し、同意を得た。大学生に対しては第2研究者が個々に依頼、研究目的を説明し同意を得た。プロ志向選手、大学生選手ともに大学の倫理委員会の規定に基づくインフォームドコンセントを得ている。

質問内容は、1. プロフィール（所属、年齢、ポジション）、2. 競技歴（競技を始めたきっかけ、スランプの経験、スポーツ選手としての転機については必ず質問を行っている）、3. 現在のやる気や体の状態、4. 競技不安、試合での不安、実力発揮の問題、5. 今後の目標、6. 競技をする理由であった。これらの質問内容については、スポーツ選手が競技において経験した出来事をライフストーリーとして語る中でどのように意味づけているのかを明らかにするという本研究の目的に合わせて選定された。

インタビュー時間は25分～50分であった。録音した音声について逐語録を作成し、分析のためのデータとした。逐語録は約4,500字程度から約12,000字程度であった。

## 3. 分 析

### (1) 転換点となった出来事について

分析にあたって、まず競技歴の中で経験した転換点となった出来事の語りを抜き出した。ここでの転換点とは、情報提供者がスポーツ選手としての転機として報告したものを中心として、自分が変わったと語った出来事である。転換点となった出来事に注目するのは、スポーツ選手がこれまでの経験を語り、意味づける際には、特徴的な転換点が語られる（杉浦，2004）ためである。記述の抜き出しは転換点となる出来事とそれによって変わったという語りの特徴を基準としてスポーツ心理学に精通する研究者3名が行い、一致しない記述は合議の上、採用不採用を決定した。その後、もう一度採用された記述を研究者3名で検討し、一致を得た。

プライバシーの保護のために、語りの中での人名、学校名、都道府県名、チーム名などは○

○で記載している。

抜き出した記述についてカテゴリー化を行った。まず類似した出来事の語りを集め、内容から命名を行った。さらにそれぞれのカテゴリーの類似性から、転換点となった出来事について、選抜チームに選ばれたり、能力が高く評価されたりなど、快の感情をもたらす肯定的な意味を持つ「プラスの出来事」と、試合に出られなかったり、怪我だったりなど、不快な感情をもたらす否定的な意味を持つ「マイナスの出来事」、進路選択や競技転向など、それ自体は肯定的・否定的の意味が定まらないが決断を必要とされる出来事として「複数の選択肢からの決断が必要な出来事（以下、決断の出来事と表記）」の3つに分類した（表1）。これらのカテゴリー化

表1 転換点となる出来事

プラスの出来事	マイナスの出来事	決断の出来事
人との出会い	試合に出られない	競技変更
高校での熱心な指導者との出会い (D1)、高校サッカーでの先生や先輩との出会い、キャプテンをしたこと (D2)、高校の時良い環境に巡り合えた (D3)、レベルの高い人に出会ったこと (D3)、人との出会い (「プロ目指すのもいいんじゃない?」と言われたこと) (P5)	メンバーに選ばれず、辞めようかと思った経験 (D1)、なかなか公式戦で使ってもらえなかった中学3年間 (D5)、中2のとき試合に出られなくなった (D6)、大学1年サッカーで試合に出られなかった (D6)、試合に出られない中学3年 (D7)、高校に入学後、試合に出られない経験 (P1)、試合に出られない経験 (フットサル1年目) (P4)	フットサルを実際にはじめてしたこと (D1)、フットサルへの競技変更 (D3、D4)、フットサルへの転向 (P4)、Fリーグができたこと (P5)、競技を転向したこと (P7)
上のレベルへの参加・招集	怪我	進路の悩み
選抜参加 (D2)、県選抜参加 (D6)、U21からサテライトに上がった時 (P2)、TOPリーグに招集されたこと (P3)、トップチームへの昇格 (P7)	怪我 (前十字靭帯断裂) (D4)、怪我 (高3の時、怪我をして最後の試合に出られなかったこと) (P1)	高校進学への迷い (強豪校か進学校か) (D4)、小学校がよいチームではなく、中学校の部活のサッカーに行ったこと (D8)、高校に上がる時、進学校かサッカーの強い学校か迷ったこと (D8)、○○地区の良い大学に行く目標をやめ、目標を競技に絞ったこと (P3)
新しい経験	スランプ・不応	
フットサルをはじめたこと。ミーティングなどの取り組み (D1)、キャプテンをまかされたこと (D7)、コーチ役をしてほしいと言われたこと (P1)、ブラジルへのフットサル留学 (P6)	小学生のクラブで不応になったこと (D3)、AチームとBチームの行き来で、うまくいかなくなった経験 (P3)、サテライトにいて、こんなとこにいていいのかと悩んだ経験 (P5)、スランプ (P6)	
	手痛い失敗	
	セレクションに不合格になったこと (P6)、勝つことを目指した相手と対戦できなかったこと (P7)	

については第1研究者が案を出し、第2、第3研究者との合議のもとカテゴリーの決定および出来事の種類決定を行った。

## (2) 出来事の意味づけのあり方について

本研究はスポーツ選手が競技を継続するにあたって経験をどのように意味づけているのかについて明確な仮説を設定しない探索的な仮説生成型の研究である。そこで本研究では、スポーツ選手が経験する出来事に対してどのように意味づけているのかを明らかにするために、語りの共通性を見出して記述し、それぞれの語りの持つ意味を解釈して示す。

## 4. 結果と考察

本研究においては、スポーツ選手が競技歴を語るにあたって様々な転換点となった出来事が語られた。表1の通り、転換点となった出来事は大きく分けるとプラスの出来事、マイナスの出来事、決断の出来事に分けることができた。そしてそれぞれの出来事に対して特徴的な意味づけのあり方が見られた。以下、プラスの出来事、マイナスの出来事、決断の出来事について、特徴的な意味づけの語りを示していく。

### (1) 達成動機や自己効力感を生み出すプラスの出来事の語り

プラスの出来事の中でも、特に自分の可能性を示してくれる人、たとえばP5が語った「プロを目指してもいいんじゃない」と言ってくれる人との出会いや、選抜に選ばれるなどより高いレベルへの昇格は、彼らの動機づけの大きな力となっているようであった。そして彼らの語りには動機づけが高まる共通するプロセスがあるように見受けられた。まず関連する語りを表2に示す。

これらの語りには、選抜やトップチームに選ばれたり、監督に評価されたりして、自分の能力が認められ、かつ高いレベルを間近で見ることによって、自信が芽生え、動機づけが高まったことが示されている。すでにある概念で言えば達成動機づけが高まった (McClelland et al., 1953)、自己効力感が高まった (Bandura, 1997) とも言えるのではないか。ここでの達成動機とは困難さにチャレンジし、卓越した水準で社会的に意味のある課題を成し遂げようとする動機づけ (鹿毛, 2013) であり、自己効力感とは達成を成し遂げるために必要な行動を計画し実行することができるという自信である (Bandura, 1997)。

表2 プラスの出来事の語り

<p>D 2 : (高校に入って) 上を目指したいっていう気持ちが強くなったっていうか、個人の。中学までは割と自分が一番みたいな世界でやってきて、高校入ってやっば〇〇君とか〇〇君とか見て、レベル違うなって思って、なんていうんすかね、自分が井の中の蛙。もうなんか自分が狭い世界でやってたなって思って。もっと広い世界みたいになって。</p>
<p>D 6 : (選抜に選ばれて) 〇〇さんがおれのことを持ち上げてくれるんだが。だからこら辺の選手だと思ってたのが、〇〇さんが言うおれはこら辺で、そこにたどり着かなきゃいかんっていうのがあったから、そっからすごい……、けっこうさぼったのね、練習とか。でも、そこらへんから真面目に行くようになって、フットサルに対して真面目になったかな。</p>
<p>P 2 : やっばU21からサテライト上がったときかな。もう一気に世界が変わったっていうか、目指すものが変わったっていう感じかな。それまでは普通に就職することしか考えてなかったけど、サテ上がってからプロを目指すようになった。</p>
<p>P 3 : 去年のU23のFリーグ選抜、日本代表みたいなU23の活動にできた年が去年なんだけど、自分がまさか選ばれるとは思ってなかったし。ま、〇〇(地区名)のチームにいるから呼ばれたっていうのもあると思うんだけど、ここで自分が呼ばれたことによって、自分はそういう位置にいるんだなって、もう。自覚も出来たし自信もついたし、そこで、ここぐらいまでこれたんだったら、じゃあ、将来的にも日本代表とか、トップチームに出れ試合で活躍できる可能性もすごくおっきくなったなっていうのがあったから。ほんとにそれで自信もついたし、これからやってく上でのやる気に対しても、全てに対してプラスになったから。</p>
<p>P 5 : 後は、〇〇(監督名)は結構大きかったかもね。結構褒めてくれて、プロ目指すのもいいんじゃないみたいな言われるじゃんね。あの人結構言うじゃんそういうこと。それで結構やる気になったかな。</p>
<p>P 5 : でも、その言葉があったおかげで、今の……今目標達成したわけじゃないけど、まだ、続けられてるっていうか。その言葉があったからじゃないけど、フットサルやれてるから、その面では大きかったと思うけど。</p>
<p>P 7 : (トップチームに混じれる機会があって) 最初は、ほんと最初の1、2回は、ほんととっげっていうか、なんか別次元だなって思ってんですけど、最近慣れてきて、早くここに行きたいなって、定着したいなって。ま、ここか、それ以上に行きたいなって。それがフットサルの中で1番転機です。</p>

本研究のプラスの出来事の語りからは、達成動機や自己効力感がどのように高まっていくのかのプロセスが推測される。まず、自分に自信がなく、現状に留まっている段階がある。たとえば「井の中の蛙 (D 2)」、「まさか選ばれると思わず (P 3)」、「こら辺の選手だと思っていた (D 6)」、「なんか別次元だな (P 7)」という自己評価が低く、目標が低い段階がある。そのような段階の時、「〇〇さんがおれのことを持ち上げてくれる (D 6)」、「けっこう褒めてくれてプロ目指すのもいいんじゃない (P 5)」と他者に認められたり、実際に上のカテゴリーのチームに昇格したりして、他者からの評価を受ける経験をする。そして間近に上のカテゴリーのチームの選手たちのプレーを見ることによって、「自分はそういう位置にいるんだなって、自覚も出来たし自信もついた (P 3)」、「将来的にも日本代表とか、トップチーム (の試合) に出れて、試合で活躍できる可能性もすごくおっきくなったな (P 3)」、「最近慣れてきて、早くここに行きたい (P 7)」など、高いレベルへたどり着けるかもしれないという自己効力感



が得られる。そして、「もっと広い世界みたい (D 2)」「そこにたどり着かなきゃいかんって  
いうのがあった (D 6)」「フットサルに対して真面目になった (D 6)」「もう一気に世界が変  
わったっていうか、目指すものが変わった (P 2)」「サテ上がってからプロを目指すよう  
になった (P 2)」「これからやってくうえでのやる気に対しても、全てに対してプラスになった  
(P 2)」「それで結構やる気になった (P 5)」「ここか、それ以上に行きたいな (P 7)」など、  
より高い目標を目指そうとする達成動機を持つようになっているのである。

この語りから見てくることの一つは、自分が思っていた以上に他者から高い評価を受ける  
ことが達成動機を高める可能性があるということである。たとえばプロになりたいという目標  
を持ったとしても、どうせ自分のレベルではたどり着けないと思っていたら達成動機は高まら  
ない。自己効力感がない状態である。そんな状態から、本研究のスポーツ選手たちの何人かは、  
自分が思っていた以上に高く評価され、そして実際に高いレベルを間近に経験することで、や  
ればできるという自己効力感を持てるようになり、それが高い達成動機の源になっているので  
ある。

速水 (1998) は自律的動機づけを促進する働きかけとして「承認を与えること」があるとし、  
自分なりに頑張って成功し、それに対して適切な承認がなされる場合が最も自律的動機づけの  
形成を促進すると述べる。そしてもともと算数ができない子が分数のテストで満点を取ったこ  
とを先生に認められ、動機づけが高まるようになり、大学生の今では数学が大好きになった例  
を示している。この大学生の例は、もともと自己評価が低かったところへ承認されることでに  
わかにか動機づけが高まるプロセスが、本研究のスポーツ選手が動機づけを高めるプロセスと非  
常に類似しており、そこに共通のプロセスがあることを示唆しており興味深い。

速水 (2001) は「自伝的記憶として残された過去の具体的経験を直接掘り起こすことが、抽  
象化された心理学的概念を扱うよりも現在の動機づけを説明するのにより豊かな情報提供にな  
る」と述べている。本研究の結果は、具体的経験を掘り起こすことで、抽象化された心理学的  
概念、達成動機づけや自己効力感といった概念の妥当性が示されたとも言える。

また、高い競技レベルの選手を間近に見ることが自己効力感や達成動機につながるという内  
容は杉浦 (2004) でも示されている。杉浦 (2004) では、「強いやつらは別世界の人間みたい  
な、そういう気持ちがあった」のが、「身近で見ると、そういう人 (競技レベルの高い選手)  
がいるのは当たり前、そこに行ける可能性があるというのを思うようになりました」という語  
りが示されている。その選手は間近で見ることの動機づけへのつながりを「地続きになった」

「地続きなんだから、そこに行けるんだって。行きやすいわ」と表現している。高い競技レベルの選手を間近に見ることは、今の自分と高い競技レベルの選手とに想像したほどの力の差や練習内容の違いがないと感じさせ、それゆえにやればできるという自己効力感とそれに基づく高い達成動機を生むと考えられる。

## (2) 強さを生み出すマイナスの出来事の語り

次にマイナスの出来事についての語りに注目する。試合に出られない、チームへの不適応、スランプ、怪我などの経験に対して、選手たちはそれらを経験したからこそその強さ、耐性、より強い競技への思いを持てるようになったと語っている(表3)。

表3 マイナスの出来事の語り

<p>D3：中学校からは基本的に普通に進んでくすよ、特にへこたれることもなく。ただ小学校のところで一番最初にくじけたのを体験したのは多分よかったことだろうなって自分で思います。そう、その一番最初にくじけて、早い段階でくじけて、なんか精神的にというか、どうしてこうかとかそういうのを考えたのはでかかったと思います。</p> <p>ああいうくじけを最初に体験したのはでかかったかなって思うんですけど。早い段階でってのは。それを知らない人たちってあんまり、あんまありっていうか若干、いいこと、悪いことだとは思わないんですけど、いいことじゃないと思うんですよ。まったくくじけることを知らないっていうんですか。</p>
<p>D6：結局なんかあっても、結局頑張って練習とか試合とかやるしかないから、たとえば試合でれんくって落ちこんどっても、結局その状況は変わるから、とりあえず練習して、結局また取り返したんだけど、その頑張った甲斐があったかなって思うから……。結構がむしゃらにやっていたのが昔からの俺の、なんかモットーじゃないけど、とりあえずやるとけみたいな、そのあれかな今は。</p>
<p>D7：ま、やっぱ辛くてものなんとかなるなっていう。高校行ってからずっとレギュラーで出たし、っていうので、辛いことを経験しても最後はなんとか笑って過ごせるなっていうのは。あの3年間がなかったら多分もっと弱いかなって思います。自分で、精神的に。</p>
<p>P1：(怪我をして高校最後の1年間がリハビリで終わってしまったことに対して) あー、もうほんと落ちないです。気持ちが基本。あそこが一番つらかったんで。今は出来ることが幸せだし、楽しいし、だから休みたくないです。休みたくないし、あと、こうやって毎日練習してるんですけど、練習だるとかならないですね。なったことないです。こっち来てから。</p>
<p>P6：やっぱ調子悪いときとかはそのときやって成功したこととか人に話せば楽になることとか学べたんで、そういうのはいまでも少し調子悪い時とか実行できるようになったんで、そのスランプがあったからこそ大きいスランプに陥らないようになったと思います。</p>

このような、あの経験があったから強くなった、成長したという語りは、これまでの研究でも多く指摘されている。

たとえば杉浦(2004)は、スポーツ選手が「ある出来事の経験を境にして、それまでは否定的な意味を持つ心理状態であったのが、肯定的な意味を持つ心理状態に変わった」という「自己転換の語り」によって、自らの成長を語ることを明らかにした。

McAdams ら (1998) は、エリクソンの生成継承性 (generativity) の概念を援用してライフストーリーの研究を行っている。生成継承性とは、エリクソンのライフサイクル論における成人期後期の発達課題であり、次の世代を世話し、作り上げていく発達状態であり、停滞性と対になるものである (エリクソン, 1973)。マックアダムスは生成継承性の高い人が、救済 (redemption) シークエンスという、たとえば父の死を家族のきずなをもたらしたものと捉えたり、失恋を自分に自信を与えてくれた出来事と捉えるなど、否定的な出来事を肯定的に捉え直し、回復や発達、悟りの物語とする特徴的な語り方を行うことを明らかにしている。

自伝的記憶の機能について研究を行った Pillemer (1998) は、信念を形作る試金石となる出来事を「アンカーとなる出来事」と名付け、それを想起することが問題や困難を乗り越える自信を与えてくれると述べている。

上記に関連して、D7の示した「あの3年間がなかったら多分もっと弱いかなって思います」という語りは、やまだ (2000) が示した仮定法の構文に基づいている。やまだによると、「もし……したら、……かもしれない。だったら……」という仮定法の語りによる現実変換は出来事を肯定的に捉えなおし、前向きに生きていく働きを持つという。D7は試合に出られなかった中学校の3年間を仮定法の語りで捉え直し、前向きに競技に取り組む力にしているのであろう。

マイナスの出来事の語りはどれも一歩間違えれば競技からの離脱を引き起こすような出来事であるが、本研究のフットサル選手は、危機を乗り越え、強くなった、成長したという語りによってそれらの出来事の意味を肯定的に転換していた。彼らは、競技からの離脱の原因となるような出来事の意味を肯定的に変えることによって、単に離脱を避けるだけではなく、競技を続けるにあたっての強さや成長とすることができたのであろう。

### (3) 今を肯定する決断の出来事についての語り

決断の出来事については、本研究の目的に関連して、進路選択、フットサルを選んだこと、大学生とプロを目指す選手の違いの3つの観点から見ていきたい。

①進路選択について 本研究において、スポーツ選手が進路を選ぶにあたっては、強豪校に行くにしても、進学校に行くにしても、フットサルのプロを目指すことにしても、いずれにせよ複数の選択肢があり、どれかを選んで現在の状況にある。可能性としては、この現在の状況を否定し、後悔する語りをすることもできるが、本研究ではすべての選手が選んだ選択肢の正

しさを肯定する語りをを行った。ここでは学校選択についての語りを示す (表4)。

表4 選択肢の正しさを肯定する語り

D4 : あっ、もし行ったら、全国だったじゃないですか……。の代だったんですよ。って思うと、若干そのスポーツの面に関しては、サッカーとかに関しては、行っときゃよかったかなって思うんですけど、ただ〇〇(チーム名)に行ったらここにはいない。まゝ頭の面でもそうだし、って考えると、こっちで正解だったのかなって思っ。
D8 : 強い方はサッカーだけな気がして、だけ集中してみたいな。大人になった時のこととか考えちゃうと大学行って、ちゃんと勉強をして就職してって考えた時にやっぱ大学行った方がいいのかなって、サッカーだけに集中するんじゃなくて。勉強しながらサッカー出来ればいいかなって。

②フットサルへの競技転向について 上記のような選択肢の正しさを肯定する語りは、フットサルへの競技転向においても見られた。本研究を行う当初は、選手たちはフットサルへの競技転向に対して、前述の為木(2007)の種目変更のように挫折感や葛藤があるのではないかと考えていた。しかしながら実際にはフットサル選手たちは、たとえば「中学校の時に、体の成長とともに結構自分の思うようなプレーがサッカーで出来なくなって(P5)」など、多少の挫折感は示しつつも、それほど大きな葛藤を感じることなく、競技転向を捉えていた。そして特徴的であったのは、フットサルに転向するにあたって、自分がフットサルに向いているところがあるという語りが行われたことである(表5)。

もう一つ特徴的であったのは、より可能性を感じるのがフットサルであったという語りである。サッカーをあきらめるというよりも、またサッカーで通用しないから仕方なくではなく、より可能性を感じるからということでフットサルを選んでいるのである。特にプロ志向の選手は、7人中5人がその語りをしていた。たとえば、彼らが「フットサルの方が合ってる(P2)」「足元がうまい(P4)」「フットサルやってたときのほうが自分らしい(P5)」「フットサル、過去やってて、楽しかった(P7)」と言ったように、実際にフットサルに向いていた、フットサルの方が楽しかったということもあるだろう。一方でフットサルを選び、今取り組んでいるという現状から振り返って、フットサルに向いていた、楽しかったエピソードが選ばれたとも言える。やまだ(2000)は、物語形式には、ストーリーによって人々が行為し、さらに行為によって、そのストーリーが確認されるという円環性があると述べたが、彼らの語りにも、円環性の特徴があると考えられる。つまり彼らはフットサルに向いていた、楽しかったというストーリーに基づいて競技を継続し、そうやって競技を継続してきたことによって、フットサルに向いている、楽しいというストーリーを語っているのである。そしてこのフットサルに向い

表5 フットサルに向いている自分という語り

D 4 : まぁ小学校の時ちょっとかじってた、インドア。体育館でやる、ミニサッカーみたいなんですけど、それがあってからかわかんないですけど、もともとちょっと足元、まぁキープとかに関しては出来るほうだとは思ってたので、それで…… (フットサルに転向した)
D 5 : フットサルを始めたきっかけは大学に入って、その……今までずっとサッカーをやってきて、親の影響かもしれないですけど、結構足元の技術をがんばって練習してきていて、それを生かせるのはフットサルかなあって思って、ちょっとやり始めたのがきっかけです。
P 2 : それは小・中とかのクラブチームがドリブルとかばっかのフットサル向きのチームで、まぁフットサルの方が合ってるのかなって思って、楽しかったし、やってて。それでやり始めた。「高校でサッカーを辞めたってことだね。それに関しての抵抗とかはなかったの？」なかったね。ボール蹴ればいやって思ってたから。大学で。
P 4 : 体も小さいし、足元がうまいって言われたから入った。結構サッカーやってるときにもフットサルに興味があって、コートが小さい分ボールもいっぱい触れるし、シュートもいっぱい打てるし、まぁ……サッカーではない細かいプレーとか展開が魅力だなんて思って、やりたいとは思ってました。
P 5 : 中学校の時に、体の成長とともに結構自分の思うようなプレーがサッカーで出来なくなって、フットサルやってた時の方が自分らしいっていうのはうすうす思ってた、で、中3のときに〇〇(チーム名)の下部組織出来るってのを聞いて、で、セレクションを受けてみたいな感じかな。
P 6 : その辞める時はもうサッカーではセンターフォワードしかやってなくて、ボール来ないし、つまんないしみたいに思った時にちょうど、そんな流れでフットサルになったんで、まぁ、フットサルの方がやってみて楽しかったんで、そっちに変えたって感じですね、すぐに。何かのきっかけを待ってて、ちょうどいいきっかけがあったんで、すぐにフットサルに移れました。
P 7 : 小学校でフットサルをやってたのは、足元をつけるって理由で入ってまして、でもそのあと、サッカーのためにフットサルをやるみたいな。まぁ、そのあとサッカー辞めて。でもフットサル過去やってて、楽しかった。

「 」は調査者の言葉

ている自分という語りは、それが事実であるかどうかは別にして、自分はフットサルに向いているのだからフットサルを選んだのだという必然性ときっと成功できるという自信を彼らに与え、今後の競技継続に肯定的な意味を持つと考えられる。

③プロ志向選手と大学生選手との違い プロ志向選手と大学生選手とで最も差が際立つのは、フットサルを競技として選ぶことが彼らの人生に与える意味づけである。その違いを端的に言うなら、大学生選手が人生の選択肢を増やすためにフットサルに取り組んでいるのに対して、プロ志向選手は人生の選択肢を減らすことでフットサルに取り組んでいるということである。

たとえば大学生選手は表6のように語っている(表6)。

大学生選手にとってフットサルは、「人生の糧(D2)」だったり「厳しくやっていることを楽しんでいる(D3)」、「楽しむべきだなんて思って(D5)」など、今の生活を楽しみ、充実させるための一手段であり、また「クラブチームのコーチをやりたい(D5)」「経験として……部活持ちたいんで(D2)」など、サッカーやフットサルのコーチとなるための将来につなが

表6 大学生選手のフットサルの意味づけの語り

<p>D1: 「えーと、フットサルまず始めたきっかけは、一個上の所属していた先輩にまずさそわれたのがきっかけで、サッカー部と迷ったけど、えー、自分が今続けているサッカーの小学生の指導との兼ね合いで、日程が一番部活やりながらサッカーの指導もできると考えた時に〇〇(チーム名)の方がいいと思って選びました。</p>
<p>D2: 「なんていうんすかね、おれの中では、職にしたいとは思ってないんすけど、経験はしたいっすね。なんかそういうプロチーム、練習だけでもいいから。経験したい気持ちはありますね。なんていうんすかね、人生の糧っていうか。経験として。そういうのがあれば、部活持ちたいんで、やっぱ先生になったら。                  教員になって、その今監督っていうこといろいろやってるんで、教員になって、でなんかまっ、フットサル部っていうものを立ち上げてしまって、今競技人口めっちゃ少ないじゃないですか。高校なんて聞いたことないくらい勢いじゃないですか。で、そしたら全国っていうのがサッカーより絶対見えやすいじゃないですか。そう考えたら、せっかくやってるし、そういうの生かして、自分が監督としてフットサルっていうのを広めれるんならやっていこうかなっていう。</p>
<p>D3: 「普通に大学生になって、いろいろやりたいこともありましたし、いろいろやりたいなって思っていましたし、その分、週5、週6でサッカーに打ち込むと時間がなくなっちゃうっていうののほうが多いっすかね。</p>
<p>D3: 「そうっすね。1部昇格を目標にやってるんですけど、でもまっ個人的な目標はないですかね。ないというか、どっちかというと、厳しくやりながらも、この厳しくやるのを楽しんでる方が大きいすかね。自分として。なんすかね。厳しくやってないわけじゃないんすけど、その厳しくやってることを楽しんでるっていう自分の方が大きいすかね。なんていうんすか、個人的にどうなりたいとかじゃなくて。</p>
<p>D5: 「最終的には、その僕はプレーヤーとしては、今フットサルやってますけど、大学を出て、先生になった暁にはクラブチームのコーチをやりたいなって思ってた、サッカーですけど。でなんかフットサルでの足技とか動き方とか何かしらサッカーの場面で役立つと思うので、そういう面ではいろいろと視野を広げて自分で吸収してそれをコーチとして還元できたらなっ最終的には思ってます。</p>
<p>D5: 「なんかモットーというか自分の一つの目標というか、こうあるべきだなんて思うのは、楽しむべきだなんて思って。何にしても。ふざけるってわけじゃないですけど、やっぱり楽しむのはいいことだし、楽しむとポジティブな考えが持てるし、楽しいことじゃないと続かないと思うんで。やっぱり今はすごい楽しいんで、今はいろいろな考えもアイデアもわいてくるし、そういう面では、フットサルもですけど、勉強もですけど、なんかその興味というか、その楽しさを見出すっていうのは重要だと思えます。</p>

る活動という意味づけがなされている。このように楽しみだったり、将来のためだったり、自らの目標を設定したりなど、競技を行うことに多様な意味づけを行うのが大学生の意味づけの特徴であった。

これに対してプロ志向選手は、そのような多様な意味づけを行うというよりは、「良い大学出るっていう目標を辞めて、サテライトに絞った(P3)」「自分の人生だからってことで、無理にやらせてもらいました(P4)」「大学もいかにフットサルで生きていこうって思って(P5)」「サテライトのセレクションを受けて、合格したんで、会社辞めて来ました(P7)」など、フットサルを進路として選ぶことで様々な他の進路の選択肢を断ってフットサルに取り組むようになっている。表7に語りを示す。

表7 プロ志向選手の決断の語り

<p>P1：高校の時に3年になって、怪我して、半年以上出来なくて、そのままサッカーが終わってしまって、で、本当は専門学校受かってたんですけど、なんかちょっとやりきれなかった気持ちがあって、フットサルもちょっと興味あったんで、まっ、受けてみようと思って、受けたら、受かったんで、じゃあもう一回チャレンジしようって思って、専門とか断って、こっち来ました。</p>
<p>P3：がんばって〇〇の良い大学出るっていう目標を辞めて、サテライトに絞った、っていうのが自分の決断の一つだったかな。「けっこうそれって人生において大きな決断じゃない？」 めっちゃくちゃでかかったね。もう。で、それによって自分の人生が決まるわけじゃんね。〇〇に、そこで〇〇の大学を選んでたらここにはいないし今。それはすごい自分の中の人生の転機だったかな。今考えれば。</p>
<p>P4：もともと専門学校に行くって親にも言っていて、で、夏までもう行くつもりだったんですけど、夏休み入る前位。でも、その同じ世代と一緒に高校でやってた人がサテライトとかで上がってプレーするようになって、自分もサテライトでやりたいなって思って。親に無理言って、まっ最初は反対されましたけど、まっ自分の人生だからってことで、無理にやらせてもらいました。</p>
<p>P5：自分は大学もいかにフットサルで生きていこうって思ってやってきたから……。</p>
<p>P6：親戚とかおじいちゃんとかおばあちゃんとかは専門学校とか大学に行ってほしいっていうので、まっ、少し迷った時期はありました。そんなに悩まなかったんで。自分のやりたいことを親も納得してくれてたんで。やろうかなって。</p>
<p>P7：若いんだし、夢追っかけた方がいいんじゃないのかみたいとか周りからいろいろアドバイスを受けて、で、サテライトのセレクションを受けて、合格したんで、会社辞めて来ました。</p>

「 」は調査者の言葉

プロ志向選手は、このような進路を絞った決断の下で「もうやるしかない (P3)」「自分の中では今年が勝負 (P2)」「会社も辞めてきたし、もう自分でこれしかないじゃないですか (P7)」「これで成功しないと食っていけないと思う (P5)」という言い方に表現されるように、フットサルをすることに意味がある、無いではなく、行動するしかないと自分を追い込む語りをしている (表8)。

プロ志向選手は自ら言う通り、まさに結果を出すしかない立場にある。大学生選手が将来へのつながりなどによってフットサルをすることに意味を付与しているのに対して、プロ志向選手は、たとえばP7の「これで食っていくことを目標に、これしかないんだというのがモチベーションでやっています」という語りが見える通り、プロになること、結果を出すこと自体がフットサルをすることの意味であると語っている。

プロ志向選手は、P5の「大学も行かずにフットサルで生きていこうって思ってやってたから」やP7の「会社も辞めてきたし、もう自分でこれしかない」という語りが見えるように、他の選択肢もある中でフットサルだけを選ぶことを「やる気 (P2)」や「モチベーション (P7)」にしているようであった。この選択肢をフットサルだけに限定する考え方は、彼らの将来展望

表8 プロ志向選手の「やるしかない」という語り

P2: やる気には満ち溢れています。ハハハ「何に対して？」んー。もう自分の中では今年が勝負って思ってるんで、今年1年で結果だして、来年にはFリーグのチームに入れるようになっていうモチベーションでやっています。
P3: 「じゃあ、現在のやる気とか。」やる気？やる気しかないね。今はもう。ハハハ もうやるしかない。大学行ってるけど、みんなみたいに就活するわけじゃないから。ほんと人生かけてやんなきゃいけないし。まあその中でみんなが、まああと自分の同じ年は今年、来年ぐらいには就職決まってお金稼ぐわって中で、じゃあ自分は今そういう年齢に達したときに、自分はどれぐらいのポジションにいるのかっていうのを考えたら、やっぱあと1～2年で、結果残してかなきゃおんなじ、みんなとおんなじような稼ぎにはならないから、ここ1、2年がほんとに勝負。だから、周りのサテライトとかよりもやるなきゃいけないし、結果も出さなきゃいけないっていうポジションだから、やる気しかないね。
P5: まあ、でも自分は大学も行かずにフットサルで生きていこうって思ってやってたから、これで成功しないと食っていけないと思うから、それが一番自分の力というか。やらなきゃいけないって思いを引き立たせるといふか。起こさせるかな、一番。
P7: もう会社も辞めてきたし、もう自分でこれしかないじゃないですか。これであと、これもう辞めちゃったらぶー太郎になっちゃうじゃないですか。これで食ってくことを目標に、これしかないんだっていうのがモチベーションでやっています。

「 」は調査者の言葉

表9 将来を考えないことで競技に集中する語り

P1: とりあえず、フットサル、サッカー関係の仕事には就きたいですね。そうなったときは、でも、なるべく考えないようにしています、わざと。なんか考えちゃうと、逃げ道というかできちゃうかなって。
P4: 「じゃあ、その40歳より後の人生とかはどう考えてる？」あー、それはまだ考えたことないですね。もうプロになることで今、それしか考えれてないんで。プロの後とかは全然考えてないです。今のところは。とりあえず、まあトップに上がることなんですけど、そうすね、トップに上がることっす。「それはどちらかというに近い目標だよな。その後の目標とかはまだ考えてない？」考えてないっすね。とりあえず今はトップに上がることを目標に一生懸命やっている。

「 」は調査者の言葉

にも見られた(表9)。彼らは将来の事をあえて考えないことで「逃げ道(P1)」を無くし、「プロになること(P4)」という目標を達成しようとしているのである。

④プロ志向選手の語りから見える特徴的な思考について プロ志向選手の語りから見えてきた、目標を達成するために将来のことをあえて考えないという思考は、スポーツ選手のセカンド・キャリアの問題にも関連する。

スポーツ選手の引退後のセカンド・キャリアは、選手が現役時代から準備することが重要であると言われている(久保田ら, 2002)。しかしながら本研究のプロ志向選手の語りから考えると、それは容易なことではないことが推測される。本研究では、P1の「考えちゃうと、逃げ道というかできちゃう」という語りが見え通り、プロ志向選手はプロになる以外の将来を考えないことによって目標を達成しようとしている。それは彼らなりの、競技に集中し、目標を



達成するための思考方法なのであろうが、セカンド・キャリアを考えるとすることは、彼らの思考方法と矛盾するのである。重野（2010）も、プロサッカー選手のセカンド・キャリアの到達過程についての研究の中で、「現役中には、選手としてのキャリアに集中し、すべてを忘れてサッカーに専念することが、多くの選手が思い抱く考えであり、価値観である。そのため現役中に、次の職業について思いを巡らせたり、具体的に職業選択のための活動を行なうケースは多くない」と述べている。本研究の結果から、スポーツ選手にセカンド・キャリアを考えさせるにあたっては、上記のような「将来を考えないことで競技に集中する」といった特徴的な思考方法を考慮する必要があるだろう。

## 5. まとめと今後の課題

本研究の目的は、様々な出来事が起こりうる競技生活の中で、スポーツ選手がそれらの出来事をいかに意味づけて、スポーツを続けているのかを、競技レベルが異なり、かつ競技転向を経験してきたフットサル選手を対象として、彼らの経験してきた出来事の語りを手がかりとして明らかにしてきた。

フットサル選手たちは、人との出会いや選抜・高いレベルに召集されるなどのプラスの出来事によって高い目標を目指す達成動機ややればできるという自己効力感を獲得し、マイナスの出来事については肯定的に意味を転換することによって、単に離脱を避けるだけではなく、競技を続けるにあたっての危機に対する強さや精神的な成長を獲得しているようであった。また決断の出来事については、進路選択にせよ、フットサルへの競技転向にせよ、現在の自分が選択してきた結果としての現状を認めることによって、フットサル選手たちは、フットサルを選んだのだという必然性とフットサルに向いているという自信を獲得し、競技継続をしているようであった。

これらの結果から、経験する出来事の意味を肯定的に捉え、今の自分を認めることが、スポーツ選手が競技を続けることを助ける考え方なのではないかと考えられる。またこの観点からスポーツ指導ということを考えて時、選手が現在の自分のおかれた状況や危機的な出来事などを肯定的に意味づけられるように働きかけることによって、本研究でフットサル選手が語ったような強さや耐性、より強い競技への思いを持てるようになるのではないかと考えられる。

プロ志向選手と大学生選手との違いについては、大学生選手たちが競技としてフットサルで行うことにさまざまな意味づけを行っているのに対して、プロ志向選手は、大学や専門学校へ

の進学をあきらめたり、退職したりすることで、「やるしかない」「これしかない」といった語りが示すように、結果を出してプロになることがフットサルを行う意味だと捉えていた。このような競技に集中し、目標を達成しようとする思考方法については、プロスポーツ選手のセカンド・キャリアにも関わる問題だと推測され、今後、引き続き研究が必要と考えられた。

#### 注

注1 このような推測は、本研究を行う理由の一つであるが、検証するための仮説ではない。後述するように本研究は仮説生成型の研究であり、フットサルへの競技転向も含めて選手がどのように自らの経験を意味づけるのか、あくまで選手の語りから明らかにしようとするものである。

注2 デジタルカメラを使ったのは音声の記憶媒体としてであり、インタビュー映像は残していない。

#### 文 献

- Bandura, A. (1997) Self-efficacy: The exercise of control. W. H. Freeman
- ブルーナー, J. : 田中一彦訳 (1998) 可能世界の心理 みすず書房 <Bruner, J (1986) Actual minds, possible worlds. Harvard University Press.>
- エリクソン, E. H. : 岩瀬庸理訳 (1973) アイデンティティ 金沢文庫 <Erickson, E. H. (1968) Identity: Youth and crisis. W. W. Norton & Company>
- 速水敏彦 (1998) 自己形成の心理 —自律的動機づけ 金子書房
- 速水敏彦 (2001) スポーツの自伝的記憶と動機づけ スポーツ心理学研究, 28 : 21-30.
- 鹿毛雅治 (2013) 学習意欲の理論 —動機づけの教育心理学— 金子書房
- 久保田洋一・野川春夫・末永尚・重野弘三郎 (2002) プロサッカー選手のキャリアチェンジ —役割卒業理論 (Role Exit Theory) を援用して— 順天堂大学スポーツ健康科学研究, 6 : 106-116.
- McAdams, D. P., Hart, H. M., and Maruna, S. (1998) The anatomy of generativity. In: McAdams, D. P., and Aubin, E. D. (Eds.) Generativity and adult development: How and why we care for the next generation. American Psychological Association.
- McClelland, D. C., Atkinson, J. W., Clark, R. A., and Lowell, E. L. (1953) The achievement

- motive. Appleton-Century-Crofts.
- Pillemer, D. (1998) Momentous events, vivid memories. Cambridge University Press.
- 佐藤浩一 (2000) 思い出の中の教師 ―自伝的記憶の機能分析― 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, 49: 357-378
- 重野弘三郎 (2010) プロサッカー選手のセカンド・キャリア到達過程 ―プロ化創世期の実情 高橋潔 (編) Jリーグの行動科学 白桃書房, 119-173.
- 杉浦健 (1996) スポーツ選手としての心理的成熟理論構築の試み 京都大学教育学部紀要, 42: 188-198
- 杉浦健 (2001) スポーツ選手としての心理的成熟理論についての実証的研究 体育学研究, 46: 337-351
- 杉浦健 (2004) 転機の経験を通じたスポーツ選手の心理的成長プロセスについてのナラティブ研究 スポーツ心理学研究, 31: 23-34.
- 為末大 (2007) 為末大 走りの極意 ベースボールマガジン社
- やまだようこ (2000) 喪失と生成のライフストーリー やまだようこ (編) 人生を物語る ―生成のライフストーリー ミネルヴァ書房, 77-108.